

第 15 章

シェルドンは なぜ退会したか

Genryu

ポール・ハリスやチェスレー・ペリーはロータリアンとして一生を終えましたが、シェルドンは 1921 年以降はロータリーとの関わりを絶ち、1930 年に退会しています。なぜ退会したのかという理由を巡って、諸説が囁かれています。

まず言えることは、シェルドンは経営学の専門家ならびに教育者であって、彼の頭の中にあるのは、いかに合理的な企業経営をして事業を発展させるかを教えることであり、その他の対社会的奉仕活動によって、社会に貢献することではなかったことです。彼の文献の中からは、職業を通じた奉仕活動以外の、対社会的奉仕活動に関しては一切触れられてはいません。

シェルドン・スクールの役割

修正資本主義が定着するまで
アメリカ経済界を担う

初期のロータリアンは
シェルドン・スクールの卒業生で
構成されていた



親睦と会員の物質的相互扶助団体^{ぶっしつてき そうごふじょ だんたい}に過ぎなかったロータリーに、新しい経営学に基づく奉仕理念を提唱したのが、アーサー・フレデリック・シェルドンです。

シェルドンの奉仕理念は、継続的な事業の発展を得るためには、自分の儲けを優先するのではなく自分の職業を通じて社会に貢献するという意図を持って事業を営む、すなわち会社経営を経営学の実践だととらえて、原理原則に基づいた企業経営をすべきだと考えました。

^{すなわ}即ち自分の事業を経営学の実践だと考えて、継続的に利益をもたらす顧客を確保する方法を、いかに編み出すかを説いたのです。も

しも対社会的奉仕活動をしたかったら、自分が得た適正な利益の中から行えばいいのです。

シェルドンの文献を読む限り、この考え方は、彼が初めて経営学の本を出版した 1902 年から最後の著作 1929 年まで、一貫して変わっていません。敢えて変わった点を探すとすれば、晩年に「利益を保全する」ことが加わったくらいです。

シェルドン・スクールは、数多くの卒業生を輩出して、修正資本主義が定着するまでのアメリカの産業界の中枢として、アメリカ経済を担っていきました。

シェルドンから見れば、ロータリアンも数多くの学生の一人に過ぎず、事実上、初期のロータリーで指導的役割を担っていたロータリアンのほとんどは、シェルドン・スクールの卒業生でした。

親睦と相互扶助という姑息な手段で世渡りをしていた集団に、大勢の卒業生を通じて経営学を学ばせ、実践させることによって、ロータリーを世界的な組織にまで発展させたのです。

He profits most who serves best はシェルドンが提唱した哲学や経営学に基づいたモットーです。

従って初期の年次大会の主役は当然のことながら、シェルドンであり、彼の考え方を聞くために多くのロータリアンが集まってきた

のです。シェルドンの言う通りに会社経営をすると、どの会社も大きく業績を伸ばしていきました。

ロータリークラブ連合会の組織の中に ^{ビジネス} Business ^{メソッド} Method ^{コミッティー} Committee を作って自らその委員長を務めて、業種別の小委員会を頻繁に開いて情報交換を行った記録が残っています。1910年代の年次大会議事録には、毎回のように ^{ビジネス} Business ^{メソッド} Method ^{コミッティー} Committee からの報告事項が掲載されています。

ところが1920年ころから ^{サービス} Service ^{ノット} not ^{セルフ} self に代わって ^{サービス} Service ^{アバヴ} above ^{セルフ} self というフレーズが使われ始めました。提唱者も、その真



Service not self
Service before self
Service above self

人道的奉仕活動を表す
モットーへの変化

Genryu

意もわからないフレーズです。

最近は「他人のことを思いやり、他人のために尽くすこと」という注釈ちゅうしゃくがつけられています、これはまったく後付けの解釈と言わざるを得ません。

その詠よみ人知らず、正体不明、意味不明のフレーズが、シェルドンのモットーと肩を並べて使われるようになってきたわけです。

さらに言葉遊びが進み、1921年には Service before self などというモットーも生まれました。さらにそれぞれのモットーの持つ意味も徐々に変化しました。自分ひとりで儲けを独占してはいけないという意味だった Service not self が己おのれを犠牲にした奉仕、無我の奉仕に変わり、Service above self は他人のことを思い遣りや、他人のために尽くす奉仕という解釈になりました。

さらに同じころから、シェルドンのモットーを排斥しようという運動がイギリスを中心に起こってきました。

このモットーに含まれている profit という単語に対する拒否反応が直接的な理由でしたが、宗教感や道德感あを敢えて避けてさ、純粋な経営学として作ったこのモットーそのものに対する反発が強く起こってきました。野蛮やばんなアメリカ人だから profit という次元の低い言葉を使っているが、よき伝統と高い倫理観りんりかんを持っているヨーロ

ツパの人間として、受け入れる^{がた}難い、次元の低いモットーだという理由でした。

シェルドンは1921年にエジンバラで開催された年次大会で「ロータリー哲学」という表題の講演をしたのを最後に、ロータリーの世界と決別しています。

健康が優れなかったという説もありますが、その後も活発に著作活動が続けたり、新しい学校用地を物色^{ぶっしょく}したりした形跡^{けいせき}がありますから、理由は別にあると考えるべきでしょう。

シェルドンの経営学としての現実的な奉仕理念と、ロータリアンの職業に対する考え方^{かいり}の間に大きな解離が生じてきたと同時に、ロータリアンの中に対社会的奉仕活動に対するニーズが、急速に広がってきました。

シェルドンの考え方とは全く違った方向に、ロータリーは一人歩きをし始めたのです。

ロータリーにおける対社会的奉仕活動が重要視されて、1923年、決議23-34で、^{サービス}service ^{アバヴ}above ^{セルフ}self と ^{ヒー}He ^{プロフィッツ}profits ^{モスト}most ^{フォー}who ^{サーヴス}serves ^{ベスト}best の双方が、対等な形でロータリーの奉仕理念として確定したことも、シェルドンにとっては不愉快な^{ふゆかい}ことであつたと推察^{すいさつ}されます。シェルドンがロータリーと袂^{たもと}を分かつ^わ誘因^{ゆういん}となつたのは1927年の

- He profits most who serves best
- Service above self

両モットーの対等処理

- 四大奉仕採択
- 職業奉仕天職論の台頭



四大奉仕制定であったと思われます。

奉仕理念を持っていなかったロータリーに新たな経営学に基づく奉仕理念を提唱して、その理念の^{もと}で大きく発展させてきたにも関わらず、この四大奉仕の制定によって、シェルドンの奉仕理念は、四つの奉仕理念の中の一つに格下げされたわけです。

さらに、この四大奉仕の制度はイギリスが中心になって作ったため、職業奉仕が^{ヴォーケイショナル} Vocational ^{サービス} Service と名付けられて、いわゆる職業^{てんしょくろん} 天職論の要素が入ってきました。シェルドンは絶対に^{ヴォーケイション} Vocation という単語は使わずに、すべて^{オキュペイション} Occupation で通してきましたから、シ

エルドンの奉仕理念は即、ロータリーの職業奉仕だとは言い難い状態になったのです。

決定的な亀裂は1929年の国際大会に、RIBI から He profits most who serves best を廃止するという決議案29-7が提案されたことです。もともとこの決議案は否決されましたが、シェルドンに大きな屈辱感を与えたことは容易に想像できます。

さらに、この大会で身体障害児対策をロータリーの最優先課題として実施することが決定したために、ポール・ハリスと意見が対立して、修復不可能になったことも否定できません。

- He profits most who serves best
廃止提案 決議29-7 否決
- 身体障害児対策の正式採択
- ポール・ハリスとの対立
- 子息の逝去



なお、チェス・ペリーは事務総長としてロータリーから収入を得ていましたし、ポール・ハリスも晩年は名誉会長の肩書きで、ロータリーの費用を使って全世界を旅行していたのに比べて、シェルドンは自らの学校経営で収入を得ており、ロータリーに対して貢献こそしたものの、何の見返りを得ていたわけではありません。

1929年に起こった世界大恐慌^{だいきょうこう}もその引き金になったのかも知れません。1929年に出版された「奉仕の原則と保全の法則」では、これまで使われなかった保全^{コンサベーション} Conservation という単語が初めて使われて、利益を保全する重要性が説かれています。

更に同じ年、最愛の息子を30歳の若さで亡くしたことも大きな原因の一つでしょう。墓誌^{ぼし}には、Arthur Frederick Sheldon (1899-1929) という記載があります。これを見ると、自分とまったく同じ名前をつけた最愛の息子が、弱冠^{じゃっかん}30歳で旅立ったことが分かります。シェルドンは自らチェロ^{かな}を奏^{あそ}ぶ音楽好きで、グリフス夫人はピアノ、息子と娘もそれぞれの楽器を持ってこれに加わり、家族4人での演奏会を楽しんだとの記録が残っています。

シェルドンは、これまでに執筆した数多くの文献の中で、神を表現するのにあえて^{ゴッド}godを使わず^{プロバイダー}providerを使ってきたのに、この「奉仕の原則と保全の法則」に限って^{ゴッド}godを数多く使っているこ

とが特徴的です。あえてキリストについて触れ、深い霧きりの彼岸ひがんにある死後の世界について触れた遺言のような文章構成は、体調と精神状態にかなりの不安定さを感じていたのかも知れません。現世で奉仕てっに徹すれば来世は極楽ごくらくに行けるという、科学者シェルドンらしからぬ発想も気になるところです。

シェルドンの文献を翻訳していて、全般的に感じたことは、非常に繊細せんさいで緻密ちみつな神経の持ち主であるに加えて、酒も煙草も吸わず健康に関しては人一倍りゅうい留意していたことが分かります。

1929年を境に連続してシェルドンを襲おそった不幸な出来事が、彼の繊細な心に致命的なダメージを与えたのかも知れません。

RI やシカゴ・クラブの資料を調べても、1921年以降のシェルドンに関する記載は一切見当たりません。シカゴ・クラブには何とか在籍はしていたものの、一切のロータリー活動からは身を引いていたものと思われまます。

1930年には、そのシカゴ・クラブからも退会し、1935年には67歳で、一人寂しくこの世を去っています。

なお、その後のシェルドン・スクールの運営は健全に行われており、たびたび教科書の改訂かいていが行われ、最後の改訂は、彼の没後10年以上経た1946年まで続けられています。



著者 田中 毅
TANAKA TAKESHI
ashicon@pop02.odn.ne.jp
尼崎西ロータリークラブ
発行者 源流の会 <http://genryu.org>

シェルドンの実像を追って
発行 2013年1月
1996年度 2680地区(兵庫) パストガバナー
2007年度 超我の奉仕賞受賞
源流の会 会長

源流の会発行文献			
文献名	著者	訳者	
シェルドンの森	田中 毅		
ロータリーの曙			
奉仕の原則と保全の法則	アーサー F. シェルドン	田中 毅	
シェルドン全集 ロータリーにおける講演集			
シェルドン全集 経営学 I Vol. 1~3			
シェルドン全集 経営学 II Vol. 4~5			
シェルドン全集 経営学 III Vol. 6~7			
シェルドン全集 経営学 IV Vol. 8~9			
シェルドン全集 シェルドンコース I Vol.1~2			小西宗十
シェルドン全集 シェルドンコース II Vol.3~4			
シェルドン全集 シェルドンコース III Vol.5~6			
シェルドン全集 シェルドンコース IV Vol.7~8			
シェルドンの実像を追って	田中 毅		